

開発が進む家事支援ロボット

◆遠隔操作ロボットによる家事支援サービスの誕生間近

毎日の家事負担に悩んでいる人は多い。「いつそのことロボットが家事をしてくれたら」は夢のような話だったが近々現実になりそうだ。人と共生するパートナーロボットの開発を手掛けるMira Robotics（ミラロボティクス）は、2019年2月、遠隔操作ロボットによる家事支援サービスを20年5月から開始すると発表した。2本のアームを持ち、高さを調節できる家事支援ロボット「ugo（ユーゴー）」をレンタルで提供し、専門のオペレーターが遠隔操作する。同社は家事代行サービス会社を持つ人材派遣会社パソナと提携しノウハウを共有し研究を進めてきた。

試作機は、洗濯物を取り出す、干す、畳むという一連の動作をすることができる。ロボットには独自のプライバシー保護機能を搭載、事前に指定する家事に必要な範囲のみ動くようにし、衣類についても形状は分かるがそれ自体は見えないようフィルタリングされ情報を制御する。人による家事代行サービスより低価格（月額2万～2万5千円程度）で提供し、今後はペットの世話や風呂掃除などサービスを拡充していく計画だ。

◆ロボット掃除機の元祖「ルンバ」も進化

18年10月に開催された最先端技術見本市「CEATEC」では、AI開発のプリファードネットワークス（PFN）が「全自動お片付けロボット」を披露し注目を浴びた。このロボットは、人間の言葉を理解し、衣類やおもちゃなどを認識しアームで掴み、指示された場所へ運ぶことができる。ロボットの内部には、PFNの自然言語処理・画像認識といった深層学習技術が活用されている。PFNはこれまで産業用ロボットなどでAI応用を進めてきたが、今後は家庭向けにも応用を広げる意向だ。

一方、ロボット掃除機の元祖といえ、米アイロボットの「ルンバ」だが、日本での18年の世帯普及率は約5%で、米国の10%に次ぐ市場だ。19年2月には間取りを学習して記憶し、効率的に掃除できる新機種を発売した。同社は今後アーム付き整頓ロボットの開発も目指すという。家事支援ロボットの開発が進むことで、共働き世帯などの期待が膨らむことは間違いないだろう。 【秋元真理子】